

## <講師陣について>

私自身が医学部受験生だった頃からずっと違和感を覚えていたことがあります。それは、何故教科ごとに先生が違うのだろうかということです。

私自身の高校時代を振り返っても、数学の先生は数学の宿題を課し、英語の先生は英語の宿題を課し、化学の先生は化学の宿題を課し・・・と、それぞれの先生がそれぞれの宿題を目一杯出す形式でした。

しかし医学部合格において最も難しいのは、教科数が多い（国公立医学部ではなおさら）ため、教科ごとにかかる勉強時間の配分を最適化する必要があることです。教科ごとに先生が違っていると、各教科の課題を目一杯だすため、最適化ができなくなってしまいます。

また、「各教科の授業を聞いてなんとなくわかること」と、「試験時間内に自力で正解する力があること」は全く別物です。

多くの学校や塾で教鞭をとられている先生も、いざご自身が医学部受験をするとなると合格できる先生は案外少ないのではないのでしょうか。

最も難しいのが、「時間をゆっくりかければ解けるけど時間内だと解ききれない」「ミスをしてしまう」など限られた時間内で正解することです。

そして、センター試験も国公立や私立医学部の入試も独特の緊張感をもって最後までミスなくやりきるためには精神力も必要です。

医学部受験生にとって最も難しく、また最も必要なアドバイスはこういったところにあると考えています。

上記の理由から、私たちは実際に医学部に合格した人、つまり医学生を講師として採用しています。また当塾を卒業し医学部に進学した卒業生も複数在籍していますので、当塾をどう活用していたかなど、より具体的なアドバイスも可能です。

\*医学生よりもプロ講師の方が教え方がうまいのでは？ とご質問を受けることがありますが、ある程度の学力があれば、解説が手元にある限り教えること自体は非常に簡単です。

中には講義のうまさがある種エンターテイメントのように捉えている方もいます。そういった意味では医学生よりも経験のあるプロ講師の方が当然“うまい”と思います。

しかし、医学部合格にとってエンターテイメントとしての講義は一切不要であると断言します。

（全く勉強する気がない人が少しでも勉強するためには、エンターテイメントのような講義や教育コンテンツも有効かとは思いますが、しかし、医学部合格に必要なモチベーションはそのようなレベルの低いものとは全く異なります。）

また、いまは非常に詳しくわかりやすい参考書がたくさん市販されていますから、それを読んでも、また質問をしてもわからないのであれば、原因は別のところ（勉強方法や参考書の取り組み方、そもそも勉強時間が不足しているなど）にあると考えるのが妥当です。

そして、繰り返しになりますが解説を聞いてわかった状態と、試験中に自分で解いて正解できる状態は全く別物です。

そのためには正しい試験の解き方を習得して徹底すること、わかった問題を素早く正確に解ける処理能力を身につけることなど様々な壁を乗り越える必要がありますが、講義だけではこういったことはまず身につけません。

#### \*講師の採用基準について

どういった講師が医学部受験生にとって最適であるかは非常に難しいところであり、年々考え方も変わっていますが、現状は下記のように考えています。

・東大理三、慶應医学部生など最難関大学の医学生が適任とは限らない  
→むしろ前提となる地頭や基礎力に乖離がある生徒の方が多いため、対応できる生徒が少ない（もちろん後述するパーソナリティとしても優秀な方であれば問題ない）

・パーソナリティ的に優れている医学生（真面目、勤勉、誠実など）がよい  
→仮に講師から何かを教わることができたとして、最も効果的なものは「考え方」や「習慣」にあると考えています。

地頭や数理的思考力、言語能力などはなかなかすぐには真似して身につけることはできません。しかし、考え方や習慣は努力することで変えることができます（と思っています）。

真面目、勤勉、誠実などパーソナリティ的に優れている医学生講師と対話を行うことで考え方や習慣が変わり結果的に成績がのびることにつながっていると考えています。

・生徒がうまくいかなかったときに思いやりをもって忍耐強く接することができる医学生がよい  
→上記と同じ理由に加え、もう1つ講師から生徒に伝えることができるものがあるとすれば「熱意」や「モチベーション」です。

医学部受験は非常に困難なものであり、これまで合格された卒業生の中でも受験まで一切壁にぶち当たることなく合格したような方は一人としていません。

そして、うまくいかなかったときにどう考え、どう軌道修正して努力を継続し、壁を1つずつ乗り越えていけるかが医学部合格において非常に重要です。

壁にぶちあたってしまうと、誰しものが不安に感じたり、一時的にモチベーションが低下します。講師はそんなときに対話を通していかに生徒様自身に前を向かせるかが大切です。

そのためには、思いやりをもって熱意を伝えることができること、そして忍耐強く接することができるのが重要です。

地頭や論理力が優れていることは講師の資質としてそれほど重要ではありません。例えば模擬試験で大失敗して落ち込んで不安になっている生徒様には論理的な説明はほとんど有効ではなく、逆効果にもなります。

まずは生徒様の考えていることや不安を聞き出して受け止めることが大切です。そのためには講師側も忍耐力が必要です。

・中堅医学部以上の学力は最低限必要

下位の私立医学部程度の学力では指導することは難しいというのが経験上いえることです。経験上なので詳細は省きます。

・大学においても勉学に励み、向上心をもって取り組んでいる医学生がよい

→医学生だったらみんな勉学に励んでいるのは当たり前だろうと思っている方もいらっしゃるかもしれませんが、燃え尽きたように遊んでいる医学生も多く存在します。

やはり勉強を教わるといって、大学で遊んでばかりいて向上心もないような医学生に教えて欲しいという受験生は恐らく皆無だと思います。

人は言葉ではなく態度や接し方から学びますから、向上心なく勉強もしていない人は態度から滲み出ます。

そして生徒様は敏感ですからすぐに察知します。

私たちが話していればどういう医学生かある程度わかりますから、そういった人は採用しないか、解雇しています。

\*現在の講師陣について

上記をふまえ、現在は当塾を卒業し医学部に進学した卒業生と、そうでない医学生を半分ずつバランスよく配置しています。

特にパーソナリティ的に優れている医学生講師を採用しています。医学生講師は定期的に契約更新を行うシステムとなっているため講師として不適と判断した場合は入れ替えを行っています。

\*医学生講師の業務について

医学生講師も個人差が大きいいため明確な境界を設定しているものではありませんが、基本的には質問対応、生徒面談が医学生講師の業務です。

一方、生徒様の課題方針の作成、受験校選び、現役生の理科社会の教科選択など重要な面はすべて私たち運営側が一括管理して指導を行っています。

＊講師との相性について

よくお問い合わせ等で「講師と相性があわない場合は、講師を変えてもらえますか？」といった旨のご質問をされる方がいらっしゃいます。

そもそも講師の力量によって生徒様に影響が左右されないために、システム自体が担当制ではないのですが、それ以上に「先生との相性が合うからやる気がでる、合わないから勉強できない」というような低いモチベーションでは医学部合格は極めて困難だと考えています。

講師陣は上記のとおり、医学生の中でもパーソナリティ的にも優れた方を採用しています。そして、他の生徒様もみな同じ環境で努力し成績をあげています。

そんな講師の方や環境と合わないと考えるのであれば、まずは生徒様自身の考え方を変えていただくことが妥当だと思われます。

(もちろん講師が明らかに不適切な発言を行ったり、生徒様にご迷惑をかけるような対応を行ったのであれば、すぐにご相談ください。ただし、少なくとも近年3年間以上はそういったことは生じていません。)

「講師がいなくても自分一人でも勉強する。そして講師をうまく活用し、さらに勉強を効果的にする。」

合格するために必要な考え方とはこういったものだと考えています。